

帯広畜産大学畜産学部共同獣医学課程・北海道大学獣医学部共同獣医学課程に 対する評価結果

I 判 定

評価の結果、帯広畜産大学畜産学部共同獣医学課程（学士課程）及び北海道大学獣医学部共同獣医学課程（学士課程）は、本協会の獣医学教育に関する基準に適合していると認定する。

認定の期間は、2023年4月1日から2030年3月31日までとする。

II 総 評

帯広畜産大学畜産学部共同獣医学課程・北海道大学獣医学部共同獣医学課程は、「各大学の教育資源を結集して、従来一大学だけでは成し得なかった共同獣医学課程を編成することにより、国際水準を満たす優れた獣医学教育を実施」することを教育上の理念とし、帯広畜産大学においては、産業動物臨床と食肉・食品衛生関係に、北海道大学においては伴侶動物臨床と感染症分野にそれぞれ強みがあることを生かし、教育資源を共有する共同教育課程を構築することにより、国際水準の獣医学教育を推進している。上記の教育上の理念に加え、教育課程を設置する各大学の理念・目的に基づき、帯広畜産大学畜産学部共同獣医学課程は、教育目的を「国際的視野と幅広い問題意識を持ち多様な分野で活躍する獣医師、すなわち動物の疾病の診断と予防技術に実践的に対応する臨床獣医学分野及び人獣共通感染症をはじめとした公衆衛生学分野に貢献できる獣医師」を養成することとしている。北海道大学獣医学部共同獣医学課程は、教育目標を「動物の健康の保持増進、公衆衛生の向上、食の安全及び生命科学の発展に寄与するために、獣医学に関する専門的な知識及び技術を教授することにより、豊かな人間性、高い生命倫理観及び国際的視野を備えた獣医師及び獣医学に関する創造性を有する研究者を養成する」としている。

これらを達成するため、共同教育プログラムを構築し、教育研究活動を展開している。具体的には、総合参加型臨床実習において、到達目標となる「Day one competencies」を設定し、学生の学習成果をログブックで把握・評価するとともに、スキルスラボを整備することで実習の反復学習を可能としているほか、伴侶動物と産業動物のそれぞれを対象に「夜間・救急獣医療実習」を実施するなど、臨床教育の充実に取り組んでいる。また、当該共同教育課程の質を保証するため、「北海道大学獣医学部・帯広畜産大学畜産学部共同獣医学課程協議会」を中心とする質保証体制を整備することに加え、学生の意見を教育に反映させる仕組みを構築してきた。これらに取り組むことで、2019年には欧州獣医学教育機関協会（The European Association of Establishments for Veterinary Educati

on : EAEVE) による国際認証の取得に至っており、顕著な成果を上げている。これは、他大学の模範にもなるものであり、今後も、我が国の獣医学教育、特に臨床教育及び公衆衛生教育の改善・改革を先導するよう、これまでの取組みを継続、深化させることが期待される。

さらに、各大学においても強みを生かした取組みが展開されている。帯広畜産大学では、充実した産業動物医療施設と「畜産フィールド科学センター」「原虫病研究センター」、ISO/IEC17025 認定を取得している「動物・食品検査診断センター」を置き、外部機関と連携しながら検査・診断及び先端研究に取り組んでいるほか、北海道大学では、「人獣共通感染症国際共同研究所」「One Health リサーチセンター」や国際実験動物管理公認協会(the Association for Assessment and Accreditation of Laboratory Animal Care International : AAALAC International)による完全認証を取得した動物実験施設を設置し、人獣共通感染症などの国際的な課題の克服に向けた研究に取り組んでいる。これら各大学に設置された附置研究所は、獣医学教育に活用するだけでなく、学術講習やセミナー等の開催を通じて社会貢献を行っており、評価できる。

くわえて、帯広畜産大学において、病理学実習で多様な動物種を取り扱うとともに、傷病動物を利用して生体検査から病理検査、症例報告までを一貫して実施するなど学生に十分な経験を提供していることや、北海道大学において、海外の大学と単位互換プログラムを築き、5つの海外獣医系大学と連携した国際化に取り組んでいることは特長である。

上記のような活動が行われている一方で、今回の評価では複数の課題が見受けられた。両大学ともに、全専任教員に占める女性教員の比率を高めるなど、多様性に配慮した教員組織を編制するよう、改善が望まれる。また、各大学における課題として、帯広畜産大学では、学位授与方針に示す「共同獣医学課程の学位授与水準」及び教育課程の編成・実施方針に示す「共同獣医学課程のカリキュラム・ポリシーの具体」をホームページや『履修の手引き』等に明示することが求められる。北海道大学では、講義負担が過大となっている教員がいるため、負担軽減に向けた工夫が望まれる。

これらの点について、改善に向けて継続して自己点検・評価活動に取り組み、その結果を改善・改革に結びつけ、獣医学教育(学士課程)のより一層の質の保証・向上を図ることにより、特色をさらに伸長し、発展していくことを期待したい。

III 獣医学教育に関する基準の各項目における概評及び提言

1 使命・目的

<概 評>

獣医学教育(学士課程)の教育目的又は教育目標は、大学ごとに定めている。帯広畜産大学畜産学部共同獣医学課程では、「共同獣医学課程が育成を目指す人材」として、「国際的視野と幅広い問題意識を持ち多様な分野で活躍する獣医師、すなわち動物の

疾病の診断と予防技術に実践的に対応する臨床獣医学分野及び人獣共通感染症をはじめとした公衆衛生学分野に貢献できる獣医師」を養成するとしている。北海道大学獣医学部共同獣医学課程では、獣医学部の教育目標として「動物の健康の保持増進、公衆衛生の向上、食の安全及び生命科学の発展に寄与するために、獣医学に関する専門的な知識及び技術を教授することにより、豊かな人間性、高い生命倫理観及び国際的視野を備えた獣医師及び獣医学に関する創造性を有する研究者を養成する」ことを定めている。両大学ともに、教育課程を設置する大学の理念・目的に沿って獣医学教育（学士課程）の目的を定めているといえる。

なお、北海道大学においては、「共同獣医学課程として教育上の理念及び養成する人材像」を掲げており、「各大学の教育資源を結集して、従来一大学だけでは成し得なかった共同獣医学課程を編成することにより、国際水準を満たす優れた獣医学教育を実施」し、「1. 獣医師としての任務を遂行するための論理性及び倫理性に裏打ちされた行動規範」「2. 動物疾病の予防、診断及び治療、動物の健康の維持増進並びに公衆衛生等に関する卓越した知識・技能」「3. 安定的な食料供給、家畜及び畜産物の安全確保、人獣共通感染症対策など地球規模の課題の解決に貢献するための国際的視点と知識及び技能」「4. 最先端の生命科学研究に触れ、生命現象に関する新たな発見や医薬品の開発などにおいて、獣医学を基礎に、自ら課題を提起し解決できる能力」という4つの能力すべてを兼ね備えた獣医師の養成を目指すことを共同教育課程ホームページに記載している。この内容について、帯広畜産大学では、「共同獣医学課程の学位授与水準」として記載されているほか、「共同獣医学課程のカリキュラム・ポリシー」(8-a～8-d)において、一部表現を変えて記載している（評価の視点1-1）。

これらの情報は学生や教職員及び社会に対し、適切に公表されている。具体的には、各大学ホームページへ掲載することに加え、帯広畜産大学においては、毎年新入生及び教職員に配付する『履修の手引き』に掲載するほか、新入生オリエンテーションの際に説明を行うことで周知を図っている。また、北海道大学においては、『学生便覧・シラバス』及び『獣医学研究院パンフレット』等に掲載したうえで、学生に対しては、学部ガイダンスで、教職員に対しては、ファカルティ・ディベロップメント（FD）の一環としてそれぞれ説明を行っている（評価の視点1-2、1-3）。

2 教育課程・学習成果

(1) 教育課程

<概 評>

<学位授与方針、教育課程の編成・実施方針の設定、公表>

学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）について、帯広畜産大学では、共同獣医学課程の学位授与方針として「動物疾病の予防・診断・治療、動物の健康の維持増進、公衆衛生等に関する卓越した知識・技術」「安定的な食料供給、家畜及び畜産物の安全確保、人獣共通感染症対策等地球規模の課題解決に貢献するための国際的視点と知識・技術」「最先端の生命科学研究に触れ、生命現象の新たな発見や医薬品の開発等において獣医学を基礎とした課題解決能力と国際的な活動を実践する能力」といった3点の学生が修得すべき知識・技能等を定めている。また、「共同獣医学課程の学位授与水準」として、「獣医師としての任務を遂行するための論理性及び倫理性に裏打ちされた行動規範を身につけている」など4点を明記しており、その内容は大項目1で既述の「共同獣医学課程として教育上の理念及び養成する人材像」とほぼ同一である。北海道大学では、獣医学部の学位授与方針として、大学の「4つの基礎理念（フロンティア精神、国際性の涵養、全人教育、実学の重視）の下、多様な獣医学の社会的使命を理解し、高い動物生命倫理観、科学的な思考力と判断力および国際的な視野を備えた、創造性と豊かな獣医師となる人材を育成」することを教育目標として、この目標とする人材像に求められる具体的な能力（学位授与水準）を身につけ、かつ所定の単位を修得した学生に学位を授与するとしたうえで、「共同獣医学課程の学位授与水準」の内容を明示している。この学位授与水準は、上述の帯広畜産大学で記載している「共同獣医学課程の学位授与水準」と一致している。

教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）について、帯広畜産大学では、大学の教育課程の編成・実施方針を踏まえつつ、「獣医師としての任務を遂行するための論理性及び倫理性に裏打ちされた行動規範を身につけるため、基盤教育・共通教育科目を配置」することなど、学位授与方針に対応した4点を「共同獣医学課程のカリキュラム・ポリシー」として定めている。そのうえで、「共同獣医学課程のカリキュラム・ポリシーの具体」として、「主に1年次学生を対象とする全学教育科目では、専攻する分野にかかわらず、本学の学生であれば当然身につけておかなければならない共通の素養として、高いコミュニケーション能力、人間や社会の多様性への理解、独創的かつ批判的に考える能力、社会的な責任と倫理を身につけること」を目的として「『一般教育演習』、『総合科目』、『主題別科目』、『外国語演習』、『共通科目』に区分される教養科目（コアカリキュラム）を開講」することなど、年次ごとに教育内容や教育課程を構成する授業科目区分、授業形態等を示している。北海道大学では、獣医学部の教育課程の編成・実施方針として「全学共通の『全学教育科目』と体系的に配置された『専門科目』をもって、6年間の学士課程における教育課程を編成」することを定め、そのうえで、「共

同獣医学課程の教育課程の編成・実施方針」として、帯広畜産大学で「共同獣医学課程のカリキュラム・ポリシーの具体」に示す内容と同一のものを定めている。

以上のように、学位授与方針及び教育課程の編成・実施方針については、共同教育課程としての統一を図ろうとしていることは読み取れるものの、両大学において方針としての位置付けや捉え方が異なる。また、記載方法についても、各大学の様式に合わせているため、異なっている。共同教育課程を運営し、同じ学位を授与していることから、方針の内容について引き続き両大学で検討し、統一性に配慮することが望まれる（評価の視点 2-1、2-3）。

学位授与方針及び教育課程の編成・実施方針は、両大学のホームページのほか、帯広畜産大学では『履修の手引き』やパンフレットに、北海道大学では『学生便覧・シラバス』に掲載し、それぞれ周知を図っている。なお、帯広畜産大学では公表媒体の中で、学位授与方針のうち「共同獣医学課程の学位授与水準」を明示しておらず、教育課程の編成・実施方針についても「共同獣医学課程のカリキュラム・ポリシーの具体」の内容を明示していない。これらは当該大学が教育を行ううえで重要な内容であるため、適切に公表するよう、改善が望まれる（評価の視点 2-2、2-4）。

<教育課程の編成>

教育課程については、教育課程の編成・実施方針に基づき、両大学ともに「一般教養教育科目」と「専門科目」の区分で編成している。帯広畜産大学では「一般教養教育科目」を「基盤教育」と「共通教育」で構成し、「基盤教育」では大学で学ぶための基盤形成と人格教育を目的として、①学ぶ科目、②生きる基盤、③共通基盤の3つに科目を区分している。「共通教育」では、幅広い農畜産の基礎知識や体験を学生に提供する中で、学生の目的意識や職業意識を育て、専門知識及び技術の主体的な選択と学習が行えるよう、「共通教育基礎科目」と「共通教育発展科目」に区分している。また、「専門科目」では「展開教育」として獣医学教育モデル・コア・カリキュラムを網羅する講義科目及び実習科目に加え、アドバンスト科目として「課題研究」と「アドバンスト演習」を配置している。北海道大学では、「一般教養教育科目」を①教養科目、②外国語科目、③共通科目、④日本語に関する科目（外国人留学生が対象）の4区分に分類するとともに、「共通教育」として①獣医学コアカリキュラム、②選択科目、③アドバンスト科目の3つに区分し、科目を配置している。なお、2019年度の入学者から新カリキュラムのもと教育を行っている。

両大学ともに、獣医学教育モデル・コア・カリキュラムを網羅し、かつ各科目の一般目標及び到達目標の数と各科目の単位数のバランスにも配慮した講義科目及び実習科目を配置しており、体系的・段階的な教育課程を編成している。また、実習科目は関連する講義を受講中の学期あるいは講義受講後の学期に設定しており、講義科目と実習科目が連動している。さらに、コア科目（講義）の9割以上を両大学の専任教員が担当

しており、実習科目については、40名以上の学生が参加する場合には2名以上の教員で指導しているほか、教員が1名の場合には複数名のティーチング・アシスタント（TA）を配置しており、教員の監督・指導のもと適正に実習を実施している（評価の視点2-5、2-6、2-7、2-8、2-9）。

獣医師の資質を涵養するための教育として、「獣医倫理」「動物福祉学」（旧カリキュラム：5年次）、「獣医倫理・動物福祉学」（新カリキュラム：2年次）では、獣医師の倫理的責務について具体的な事例を挙げて獣医倫理に関する規範的な知識を教授するとともに、獣医師が取り扱う動物種の動物福祉に関する現状を学ばせている。「獣医法規」（旧カリキュラム：5年次、新カリキュラム：4年次）では、多様な獣医事関係の諸法規の目的や解釈等について解説を行うことで獣医師の社会的責務について理解を促しており、獣医師に必要な倫理観を涵養している。また、「コミュニケーション論演習」（旧カリキュラム・5年次）、「獣医コミュニケーション演習」（新カリキュラム：4年次）では、コミュニケーションスキルの理論を教授し、演習を通じて基本的手法を修得させるほか、旧カリキュラムにおいて2年次から6年次に行う「短期現地実習」では、全国の農業共済組合の診療所や動物園、海外の大学等の相談員に相談のうえ、学生個人が企画立案する主体的なインターンシップとして実習を行っている。加えて、新カリキュラムにおいて2年次に開講する「札幌基礎獣医学演習・獣医学概論」では、グループ討論や発表を通じて、課題発見能力やコミュニケーション能力等の重要性を理解させるとともに、さまざまな分野で活躍する獣医師による講義を行うことで、獣医師としてふさわしい協調性や態度を身につけることを目指しており、適切な教育が実施されている（評価の視点2-10）。

アドバンスト科目としては、基礎、病態、応用、臨床の分野ごとに「アドバンスト演習」を実施している。特別研究（卒業研究）については、5年次前期から取り組むこととし、「課題研究」を必修科目として配置している。同科目において作成した卒業論文（課題研究論文）については、遠隔システムを用いて2大学合同の発表会を実施することにより、学生の研究に対するモチベーション維持を図っている。実地研修（インターンシップ）については、旧カリキュラムの「短期現地実習」を新カリキュラムから必修の「短期現地実習Ⅰ・Ⅱ」として単位化し、多様な派遣先を確保している（評価の視点2-15、2-16、2-17）。

総合参加型臨床実習については、獣医学モデル・コア・カリキュラムの内容に沿って、「伴侶動物獣医療実習Ⅰ・Ⅱ」「産業動物獣医療実習Ⅰ・Ⅱ」に加え、「夜間・救急獣医療実習Ⅰ・Ⅱ」を実施している。「伴侶動物獣医療実習Ⅰ・Ⅱ」は帯広畜産大学において2週間、北海道大学において4週間実施しているほか、「産業動物獣医療実習Ⅰ・Ⅱ」は、帯広畜産大学に所属する学生が同大学で4週間、北海道大学に所属する学生は帯広畜産大学で3週間、北海道大学で1週間の実習を実施している。「夜間・救急獣医療実習Ⅰ・Ⅱ」では、両大学の学生に帯広畜産大学で産業動物を、北海道大学で伴侶動物を

対象に実習を実施することで、通常の診療時間外及び救急外来の診療を実践・体験させていることは特色として評価できる。また、両大学とも、総合参加型臨床実習前の5年次前期に獣医学共用試験（vetCBT・vetOSCE）を実施しているが、その後の総合参加型臨床実習に余裕を持って臨めるよう、新カリキュラムでは受験を4年次3月に早めるよう改善している。臨床実習に際しては、卒後初日の獣医師が具備すべき、知識、技能、態度として36項目の到達目標を定めた「Day one competencies」を設定するとともに、ログブックを作成することで、各項目について自己評価と教員評価を通じて随時達成度を確認しながら実践的な能力の涵養を図っていることは、評価できる（評価の視点 2-11、2-12）。

動物死体を活用した解剖学教育及び病理学教育について、両大学ともに受講生数と動物数を適正な割合で実施するとともに、各カテゴリー（小動物、産業動物、鳥類）で少なくとも1つの動物種について実習を行っている。特に、解剖学実習においては各カテゴリーの動物死体を確保しており、一頭あたりの学生数も少なく、学生に十分な実習機会を与えている。また、病理学教育について、帯広畜産大学では、各カテゴリーですべての動物種（犬、猫、牛、馬、豚、鶏、その他）を取り扱っていることに加え、アドバンスト科目として配置する「アドバンスト演習」においてもさまざまな動物種の病理学教育を実施するなど、極めて多くの症例を扱っている。さらに、傷病動物を利用した教育プログラムとして、臨床現場において予後不良と判断された動物（牛）について、臨床スタッフのサポートのもと、生体検査から病理検査、症例報告までを一貫して実施している。加えて、『病理解剖ハンドブック』を作成し、到達目標に対する達成度の確認が行える仕組みを整えるなど、充実した病理学教育を行っていることは、評価できる（評価の視点 2-13、2-14）。

<教育方法>

学生が授業科目を体系的に履修できるよう、帯広畜産大学では「カリキュラム・フローチャート」を、北海道大学では「カリキュラム・マップ」を整備し、学位授与方針と科目群の関連性や、各科目間の関連性を明示している。これらの資料は各大学でホームページや『学生便覧・シラバス』（北海道大学）等に掲載しているが、どちらも学生に適切な履修を促すにあたり優れた内容であることから、両大学で共有することが望まれる（評価の視点 2-18）。

シラバスには、すべての授業科目で授業概要、到達目標、授業計画、成績評価の基準と方法を明記しており、両大学のホームページ及び『学生便覧・シラバス』（北海道大学）等で公開している。シラバスの記載内容を改善する仕組みとして、各大学で学生による授業評価アンケートや教員アンケートを実施することに加えて、教務委員会に各学年の学生代表により組織される学生会が参加し、意見を述べている。これらの結果を踏まえ、教務委員会及び「質保証（QA）委員会」においてシラバスと授業内容の整

合性を確認することで、改善・検討が必要な点を調査している。各大学で調査した結果については、両大学合同の教務委員会及び「質保証（QA）委員会」においてその内容を精査し、「共同獣医学課程協議会」に改善を提案する仕組みとなっている。このように学生代表が各大学の教務委員会に参加することで、シラバスや授業内容の改善に学生の意見が反映される仕組みを整備していることは、特色として評価できる（評価の視点 2-19、2-20）。

成績評価と単位認定に関しては、両大学とも「学習成果の評価の方針」（アセスメント・ポリシー）を定め、ホームページで公開している。成績評価はシラバスに明示した各科目の「成績評価の基準と方法」として記載する内容に沿って行っており、「学習成果の評価の方針」には、原則として相対的評価を実施することと、相対的成績評価の分布割合を明示している。また、成績評価に対する学生からの異議申立制度を設けており、その手続や所定の書式を「学生からの成績評価に対する申立て制度実施要項」「成績評価に対する申立て制度の取扱いに関する申合わせ」（帯広畜産大学）、「獣医学部専門科目における学生からの成績評価に対する申立て制度の実施要項」「獣医学部専門科目の成績評価に対する申立て制度の取扱いに関する申し合わせ」（北海道大学）に明示し、両大学ともに、ポータルサイトや学内掲示により成績確認期間等の周知を図っている。なお、両大学の学生が所属大学以外で開講する科目の成績について異議がある場合には、該当科目の科目責任者に問合せを行ったうえで所属大学の窓口にて所定の書式を提出し、「成績評価審査会」において調査・検討を行うこととしている（評価の視点 2-21、2-22）。

当該獣医学教育課程では、新カリキュラム（2019年度以降入学者）と旧カリキュラム（2019年度以前入学者）ともに、それぞれ2年次、4年次、5年次への進級時に進級要件を設けている。卒業要件については、6年以上在学し、所定の単位を修得することを求めており、帯広畜産大学では『履修の手引き』、北海道大学では『学生便覧・シラバス』等において進級要件及び卒業要件を掲載し、学生に周知を図っている（評価の視点 2-23、2-24）。

<共同教育課程等に伴う教育方法>

共同教育課程として授業を実施するにあたり、コア科目については、ICTを活用した遠隔授業のほか、科目に応じて、学生又は教員が大学を移動して実習やその他授業を実施している。例えば、「食肉衛生学実習」は、北海道大学の学生は帯広畜産大学に移動し、帯広畜産大学構内にある食肉加工実習施設（と畜エリア）等を利用して、と畜検査、食肉衛生検査を実際に体験し、と畜検査、畜産物（食肉）の衛生的な取り扱いを学ぶほか、「人獣共通感染症学」は、北海道大学の附置研究所である「人獣共通感染症国際共同研究所」の教員が、両大学の学生に対し講義を行っている。また、既述の通り総合参加型臨床実習についても学生が大学を移動して実習に参加している。このように、

帯広畜産大学においては産業動物臨床と食肉・食品衛生関係に、北海道大学においては伴侶動物臨床や感染症分野にそれぞれ強みがあることを生かして、十分な教育効果を上げるよう、相互に補完する教育を提供していることは評価できる。

遠隔授業や移動授業の実施にあたっては、マニュアルを作成し、適切な実施に努めている。なお、2大学合同の「質保証（QA）委員会」及び教務委員会等でアンケートを実施・分析することで、教育方法の効果を検証し、改善につなげている（評価の視点 2-25、2-26、2-27）。

<提 言>

(1) 特色

帯広畜産大学・北海道大学（共通）

- 1) 総合参加型臨床実習として、学生に診療時間外の入院患者及び救急外来患者の診療を実践・体験させる「夜間・救急獣医療実習Ⅰ・Ⅱ」を開講し、伴侶動物と産業動物を対象に実習を行っていることは特色として評価できる（評価の視点 2-12）。
- 2) 臨床実習における到達目標として「Day one competencies」を設定するとともに、ログブックを作成することで、身につけた能力を自己評価と教員評価により随時確認しながら実践的な能力の涵養を図っていることは、評価できる（評価の視点 2-12）。
- 3) シラバスの記載内容や授業の改善を行うにあたり、教務委員会に学生代表が参加し、意見を述べる仕組みを有していることは評価できる（評価の視点 2-20）。
- 4) 帯広畜産大学においては産業動物臨床と食肉・食品衛生関係、北海道大学においては伴侶動物臨床と感染症分野にそれぞれ強みがあることを十分に生かし、相互に補完する教育を提供することで学生に十分な経験をさせていることは評価できる（評価の視点 2-25、2-26、2-27）。

帯広畜産大学

- 1) 病理学実習において、生体検査から病理検査、症例報告までの一貫した実習を実施していることは評価できる（評価の視点 2-14）。

(2) 検討課題

帯広畜産大学

- 1) 学位授与方針に示す「共同獣医学課程の学位授与水準」及び教育課程の編成・実施方針に示す「共同獣医学課程のカリキュラム・ポリシーの具体」は、共同教育課程として教育を行ううえで重要な内容であるため、ホームページ及び『履修の手引き』等において適切に公表するよう、改善が望まれる（評価の視点 2-2、2-4）。

(2) 学習成果

<概 評>

学位授与方針に示した知識、技能、態度等の学生の学習成果を把握・評価する方法として、「カリキュラム・フローチャート」(帯広畜産大学)、「カリキュラム・マップ」(北海道大学)を活用し、各科目の履修状況を確認することで学習成果を把握しているほか、各科目の定期試験やレポート等による成績評価と共用試験の結果を踏まえ学習成果を段階的に把握・評価している。加えて、臨床実習では到達目標 (Day one competencies) を設定し、学生の学習成果の修得状況をログブックで把握・評価している (評価の視点 2-28)。

学習成果に関連して、過去5年間の新卒者の国家試験合格率は、おおむね適切な水準を維持しており、過去5年間のうち、帯広畜産大学は2018年度を除く年度で、北海道大学はすべての年度で80%を上回っている。また、卒業生の進路状況・活躍状況を把握する仕組みについては、共同教育課程として、卒業生に対し「卒業時アンケート」を実施するとともに、2019年度には卒業生の主な就職先に対し、卒業生に関する評価アンケートを行っている。帯広畜産大学では、進路状況調査を年3回実施し、卒業生の就職先情報を収集するとともに、卒業生に関するアンケート調査を実施しており、北海道大学では、卒後5年、10年、15年を経過した卒業生に対し、卒業後の進路や活躍状況を問う設問を設けたアンケート調査を実施している。なお、両大学とも過去5年間の獣医師国家試験合格者の80%以上が獣医学関連分野に就職している (評価の視点 2-29、2-30、2-31)。

3 学生の受け入れ

<概 評>

学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）については、各大学において獣医学教育（学士課程）の目的に基づき定めている。

帯広畜産大学では、「農畜産の幅広い分野で活躍する実践的な専門職業人」を育成するため、『農場から食卓まで』の幅広い考え方で現場に適応できる知識と能力を身につけたい人」「北海道十勝地域の豊かな自然と風土のもとで、食と農の大切さ、動植物の命の尊さを学びたい人」など5点の求める学生像を定めており、北海道十勝地域にある特性や優位性を受験生に分かりやすく説明するものとなっている。なお、同方針には、入学者の選抜方法として、一般選抜（前期日程・後期日程）における選抜方法及び判定方法を明示している。

北海道大学では、求める学生像を「1. 知識・技能」「2. 思考力・判断力・表現力」「3. 主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度」の3項目にわたって定めており、例えば「2. 思考力・判断力・表現力」では「動物を愛するとともに、動物を科学的観点から客観的に観察・思考することのできる学生」などを、「3. 主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度」では「獣医学に関わる国内・国際的問題を多様な人々と協働して解決したいと考える学生」などを明示しており、当該大学のこれまでの長い歴史と実績に基づき、将来において専門性と国際性を持って活躍できる人材を育てようとする意欲を読み取ることができる。また、同方針では「4. 入学前に学習しておくことが期待される内容」として「獣医学を学び理解するのに必要な理系科目の学習」など2点についても定めているほか、「入学選抜の基本方針」として、入試区分（一般選抜（前期日程・後期日程）、帰国子女入試、私費外国人留学生入試）ごとに対象者と選抜方法、判定方法についても明示している。

なお、学生の受け入れ方針を定めるにあたっては、共同教育課程として求める学生像等の統一は図っていない。入学した学生には両大学で同じ学位を授与していることから、同方針についても一体性に配慮することが期待される。

学生の受け入れ方針の公表については、各大学ホームページのほか、『入学選抜要項』『学生募集要項』（帯広畜産大学）、『獣医学部案内誌 光れる北を』（北海道大学）等に掲載することで、周知を図っている。さらに、北海道大学では『入学選抜要項』において出願手続の流れや、個別学力検査等の期日及び時間帯等を図表を用いて説明しており、これは受験生の理解を促すに役立つものといえる（評価の視点 3-1、3-2）。

入学選抜については、学生の受け入れ方針に基づき、両大学ともに一般選抜（前期日程・後期日程）を行っている。これに加えて、北海道大学においては「帰国子女入試」「私費外国人留学生入試」を実施しているほか、入学後に所属する学部・学科を決定できる総合入試を行い、2年次編入を可能とするなど、多様な志願者層に複数の受験機会を与えている。帯広畜産大学においては、現在国際バカロレアを利用した入試制度の導

入を検討していることから、今後の取組みが期待される（評価の視点 3-3、3-4）。

定員管理については、各大学 40 名、計 80 名の入学定員を設定しており、過去 5 年間の入学定員に対する入学者数比率は、帯広畜産大学においては 100～102.5%、北海道大学においては 102～110%で推移しており、おおむね適正に入学定員を管理している（評価の視点 3-5）。

4 教員・教員組織

<概 評>

教員組織を編制するにあたり、帯広畜産大学では教員組織の編制方針として「教員組織においては、両大学教員それぞれの教育・研究分野が『獣医学モデル・コア・カリキュラム』に対応できるように、各教員が専門とする領域を含む教育・実習科目を担当し、獣医学教育に特有の多彩な教育科目に対応する」こととしたうえで、「獣医学研究部門において、職位に応じた各年齢層の教員をバランス良く配置し、若手教員が教授等の指導・助言の下、自主的な教育研究活動を行うことができるよう環境を整備する」ことを定めている。一方、北海道大学では、「大学院獣医学研究院には、獣医学部門を置き、6分野及び11教室により編成」することとしているものの、教育目標を実現するために求める教員像や年齢構成、性別のバランス等を明示した教員組織の編制方針は定めていないことから、教育課程にふさわしい教員組織を編制するための考え方を示した方針の策定が望まれる（評価の視点4-1）。

両大学の専任教員数は108名（専任106名（帯広畜産大学49名、北海道大学57名）・特任2名（帯広畜産大学1名、北海道大学1名））であり、獣医学教育に関する基準に定める学生80名に対する必要専任教員数73名を上回っている。専任教員は、導入・基礎分野、病態分野、応用分野、臨床分野（伴侶動物・産業動物）の各分野におおむね適切に配置しており、コア科目及びアドバンスト科目の実施にあたっては、担当教員の専門分野や業績、経験等を考慮したうえで適切な担当者を配置している。専任教員の獣医師免許保有率及び職位ごとの年齢構成のバランスについてもおおむね適正である。一方で、当該共同教育課程の専任教員における女性の割合は約12%と低いことから、多様性に配慮した教員組織を編制するよう、改善が望まれる。また、帯広畜産大学において、40歳代の助教が若干多い傾向にあるので、今後の昇格人事や採用に関して考慮されたい（評価の視点4-2、4-3、4-4、4-5、4-6）。

教員の募集・任免・昇格に関して、帯広畜産大学では「帯広畜産大学教員選考規程」、北海道大学では「国立大学法人北海道大学教員選考基準」「教授候補者選考についての基本的考え方」「国立大学法人北海道大学における教員選考についての指針」「教授候補者選考内規」「准教授候補者選考についての申し合わせ事項」において、各職位別の資格要件や手続を定め、適切に行っている（評価の視点4-7、4-8）。

専任教員の授業担当時間数について、帯広畜産大学においては大きな偏りはなく、概ね適切であると判断できるものの、北海道大学においては、一部教員の講義負担が大きいため、研究時間や授業準備時間を確保できるよう、改善が望まれる（評価の視点4-9、4-10）。

教員の資質向上を図るための組織的かつ多面的なFD活動として、毎年度1回、当該共同獣医学課程の全教員が参加する「合同FD」を開催し、遠隔授業や国際認証など多岐にわたるテーマを取り扱っている。また、各大学においても組織的かつ多面的なFD

活動が行われている。特に、帯広畜産大学においては2020年度からメンター制度を導入し、若手教員（特に助教）がワークライフバランス、教育研究に係る疑問や悩みを相談できる体制を構築していることは特長である（評価の視点4-11）。

<提 言>

(1) 検討課題

帯広畜産大学

- 1) 教員組織の編制方針を踏まえつつ、多様性に配慮した教員組織を編制するよう、改善が望まれる（評価の視点4-6）。

北海道大学

- 1) 教育目標を実現するために求める教員像や年齢構成、性別のバランス等を明示した教員組織の編制方針を策定し、多様性に配慮した教員組織を編制するよう、改善が望まれる（評価の視点4-6）。
- 2) 一部教員の講義負担が大きいため、研究時間や授業準備時間を確保できるよう、改善が望まれる（評価の視点4-9）。

5 学生支援

<概 評>

学生生活に関する相談・支援体制として、両大学ともにクラス担任制を設け、学生が抱えるさまざまな問題について相談に応じる体制を整備している。帯広畜産大学では、1年次から4年次には各学年3名のクラス担任を配置しているほか、5年次及び6年次では課題研究指導教員が卒業研究の指導や就職の相談に応じている。加えて、全学の学生相談室や保健管理センターにおいてもカウンセラーや医師などの専門家が相談に応じる窓口やハラスメント被害に関する対応窓口を設置し、随時相談を受け付けている。北海道大学では、各学年にクラス担任と副担任を配置していることに加え、全学として学生相談総合センターを設置し、同センターに学生相談室、留学生相談室及び「アクセシビリティ支援室」を置き、各種相談に応じている。なお、これらの学生に対する支援体制については、両大学のホームページのほか、帯広畜産大学では『学生生活のしおり』、北海道大学では『学生便覧・シラバス』及び『学生生活お助けガイド』に掲載し、学生への周知を図っている（評価の視点5-1）。

学生の自主的な学習を促すために、各大学が利用するポータルサイト上に授業の録画や、実習の予習を可能とする動画コンテンツをアップロードしており、両大学のコンテンツを当該教育課程の学生が視聴できるよう整備している。また、各大学にスキルラボを整備し、多様な医療シミュレーター等を配置することで、学生の反復学習を可能としている。加えて、帯広畜産大学では伴侶動物系臨床研究室と家畜病理学研究室が連携して「臨床－病理－カンファレンス」（CPC）を定期的を開催し、学生に公開しているほか、病理解剖の研究室に所属していない学生の参加を認めるなど学生が自主的に学習できる環境を提供している。また、北海道大学では図書室とeラーニング室を24時間開放し、学生がいつでも自習できる環境を提供している（評価の視点5-2）。

障がいのある学生や留学生等の多様な学生への支援体制として、帯広畜産大学では、特別修学支援室・学生相談室、北海道大学においては既述の学生相談総合センターに設けられた相談室が、授業担当教員や各部署と連携し、支援を行っている。経済的支援としては、各大学において入学料及び授業料の減免を行うほか、独自の奨学金制度を整備している。また、心身の健康や保健衛生等に関する相談体制として、帯広畜産大学では学生相談室や保健管理センター、北海道大学では学生相談総合センターや保健センターにおいて、各センターに所属するカウンセラーや医師が対応している。さらに、ハラスメントの防止に向け、帯広畜産大学では「帯広畜産大学ハラスメントの防止に関する規程」「帯広畜産大学ハラスメントの防止等に関するガイドライン」を定め、ハラスメント対策委員会を設置し対応にあたっている。北海道大学では「国立大学法人北海道大学ハラスメント防止規程」「国立大学法人北海道大学におけるハラスメント防止に関するガイドライン」を整備するとともに、ハラスメント相談室を設置し、専門の相談員が相談に応じる体制をとっている。加えて、両大学ともに啓発チラシの掲示やハラスメン

ト防止に関する研修を実施し、教職員に対して啓発活動を行っている（評価の視点 5-3、5-4、5-5、5-6）。

進路支援に関して、帯広畜産大学では、獣医担当教員2名が配置された就職支援室において就職に係る情報の収集及び情報提供を行うとともに、必要に応じて課題研究・卒業研究を担当する教員と連携をとりながら就職に関する相談・指導を行っている。北海道大学では、キャリア支援センターに加え、学部の学生委員会に就職担当教員を配置し、就職指導を行っている。また、両大学ともに公務員獣医師説明会や企業研究セミナー等の各種就職説明会を実施しており、適切な体制のもと進路支援を行っている（評価の視点 5-7）。

6 教育研究等環境

<概 評>

<施設・設備>

帯広畜産大学と北海道大学には、獣医学教育に関わる施設・設備として講義室、実習室、実験室、研究室等を整備しており、獣医学教育に必要な学術情報資料については、各大学の附属図書館及び獣医学研究院図書室（北海道大学）に配架するとともに、図書館で契約する電子ジャーナルやデータベースを利用することで必要な情報を入手できるようになっている。また、講義資料については、当該共同教育課程の共通プラットフォーム「Vet Portal」を利用し、両大学の学生に提供しているほか、授業の予習・復習のためのビデオコンテンツを各大学で利用するポータルシステムにアップロードし、両大学の学生が活用している（評価の視点 6-1、6-2）。

動物実験施設に関しては、両大学ともに動物実験倫理・動物福祉に配慮して整備されている。動物実験に関する学内規則として、各大学で「動物実験等に関する規程」及び「動物実験実施マニュアル」を整備しており、これに基づき「動物実験委員会」を設置し、動物実験計画に係る基本指針、飼養保管基準、関係法令及び「実験動物等に関する規程」への適合や動物実験の実施及び結果に関する事項などについて審議・調査に適切に取り組んでいる。なお、北海道大学では動物実験において、国際実験動物管理公認協会（AAALAC International）の完全認証を受けた動物実験施設を有しており、同施設において適切な動物実験を行っていることは特色として評価できる。病原体等を利用した実験については、「病原体等安全管理規程」及び「病原体等安全管理取扱マニュアル」を各大学で整備し、監督指導する委員会として「病原体等安全管理委員会」を設置している。また、遺伝子組換え実験についても、「遺伝子組換え実験等安全管理規程」と「遺伝子組換え実験等安全管理マニュアル」に基づき、「遺伝子組換え実験等安全委員会」を設置しており、各委員会の監督指導のもと実施している（評価の視点 6-3、6-4、6-5、6-6、6-7、6-8、6-9）。

<各獣医学教育組織が設置する必要がある施設・設備>

附属獣医学教育病院は両大学ともに適切に整備されており、帯広畜産大学では産業動物、北海道大学では伴侶動物に関して、学生が高度な獣医療を経験できる環境となっている。特に、帯広畜産大学の産業動物臨床棟は、大動物の臨床教育用施設として大動物病院、研究室、講義室の3ブロックから構成されており、大動物病院には大型の診察・処置室のほか、可動性油圧式手術台、麻酔吸入器、心電図・血圧モニター、人工呼吸器を備えた手術室を整備しており、充実した総合参加型臨床実習を可能としていることは、評価できる。

総合参加型臨床実習の実施にあたっては、実習前にガイダンスを行い、実習中の心構えや注意事項について説明を行うことに加え、学生の実習状況を確認するログブック

を通じて実習の進捗状況を随時確認することで適切な実施に努めている。また、各大学の附属獣医学教育病院には、総合参加型臨床実習を実施するために必要な教員・スタッフ・薬剤管理者、事務管理者についても適正な数を配置しており、患畜（症例）数についても、産業動物、伴侶動物それぞれにおいて十分な数を確保するなど、適切な体制のもと実施している。さらに、当該共同教育課程では大項目2で既述の通り、「伴侶動物獣医療実習」「産業動物獣医療実習」及び「伴侶動物夜間・救急獣医療実習」等を実施しており、総合参加型臨床実習を行うにあたり両大学の施設が十分に活用されている。なお、今後は総合参加型臨床実習等に用いるPET-CTの設置が期待される（評価の視点6-10、6-11、6-12、6-13、6-14）。

<各獣医学教育組織が選択して設置することが望ましい附属施設>

両大学ともに特色ある附属施設を有し、教育研究に取り組んでいる。帯広畜産大学では、「動物・食品検査診断センター」を設置しており、同センターは①細菌分野、②真菌分野、③ウイルス分野、④毒性分野、⑤検査開発分野の5つの分野から構成され、ISO/IEC17025 認定を取得した試験機関として各微生物種に対応した検査診断を行っている。また、当該大学には国内唯一の「原虫病研究センター」を設置している。同センターは、OIE コラボレーティングセンターに認定されており、国内外の大学や関連省庁及び国際機関と連携しながらヒトと家畜の原虫病の制圧に向けた先端研究に取り組んでいる。また、学内に設置された「畜産フィールド科学センター」では、「産業動物獣医療実習」等の実習を行っているほか、酪農生産や馬を利用した障がい者乗馬等の社会活動を行っている。加えて、キャンパス内に屠畜・解体施設を有し、食品衛生実習を通じて食の安全教育を行っている。北海道大学では、動物施設として中小動物を飼育する「動物施設Ⅰ」に加え、「大動物飼育施設」「感染・化学物質病態教育研究施設」やバイオセーフティーレベル3の感染動物実験施設である「動物施設Ⅱ」を有し、動物福祉に配慮した動物実験を実施するだけでなく、適切な動物実験の実施について指導力を発揮する人材の育成に寄与している。さらに、「人獣共通感染症国際共同研究所」では、人獣共通感染症の診断・予防・治療に関する基礎・応用研究に取り組むほか、人獣共通感染症の国際拠点として国内外の研究者と交流・連携し、感染症の専門家の養成に取り組んでいる。「One Health リサーチセンター」では、国際行政・協力機関・国内外大学・研究機関及び民間企業から多様な人材が組織・研究室の壁を超えて集い、感染症出現リスクの予測、潜在的な化学物質汚染状況の摘発、医療・獣医療の進展などに向けた活動を行っている。以上のように、各大学において設置したこれらの施設における活動は、獣医学の発展に資するものとして評価できる（評価の視点6-15）。

<研究倫理や研究・診療活動の不正防止>

研究倫理や研究・診療活動の不正防止に関して、帯広畜産大学では「国立大学法人帯

広畜産大学における研究活動の不正行為に関する取扱規程」「国立大学法人帯広畜産大学研究費の不正使用防止等に関する規程」、北海道大学では「北海道大学における科学者の行動規範」「国立大学法人北海道大学における研究活動上の不正行為に関する規程」を定め、診療活動の不正防止についても、これらの規程に基づき運用している。また、各大学において、毎年度研修会を実施するほか、研究倫理教育（e-ラーニング）を受講させ、意識向上に努めている（評価の視点 6-16、6-17）。

<国際性を踏まえた教育環境の整備>

国際性を踏まえた教育環境の整備として、帯広畜産大学で実績は少ないものの、学生の海外派遣及び留学生の受け入れを行っている。また、北海道大学では新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、2020年度及び2021年度は中止したものの、2017年度から2019年度にかけては毎年15名以上の学生を海外に派遣し、留学生も受け入れている（評価の視点 6-18）。

当該共同教育課程の特長として、教育研究環境の充実に努めるとともに、2019年度に欧州獣医学教育機関協会の完全認証を取得するなど、国際通用性のある獣医師の養成及び獣医学教育の水準向上に取り組んでいることは高く評価できる。さらに、各大学でも国際化を推進しており、帯広畜産大学では獣医・農畜産融合の国際共同研究を推進し、食と動物に係る世界の諸問題の解決に貢献することを目的に「グローバルアグロメディシン研究センター」を設立したほか、海外の大学と連携し、共同研究や講義・セミナーを実施している。また、北海道大学では、「国際獣医師人材を育成する獣医学教育世界展開プログラム」を展開しており、タイのカセサート大学との単位互換プログラムとして産業動物臨床実習等を実施するほか、部局間交流協定に基づき、5つの海外獣医学系大学と連携して臨床研修・野生動物学実習を実施するなど、教育の国際化に積極的に取り組むことで、国際感覚を備えた人材の育成を行っていることは評価できる（評価の視点 6-19）。

<提 言>

(1) 長所

帯広畜産大学・北海道大学（共通）

- 1) 教育研究環境の充実に努め、欧州獣医学教育機関協会の完全認証を取得するなど、国際通用性のある獣医師の養成及び獣医学教育の水準向上に取り組んでいることは高く評価できる（評価の視点 6-18）。

(2) 特色

帯広畜産大学

- 1) 産業動物の充実した診察を行うことが可能な産業動物医療施設や「畜産フィー

ルド科学センター」等を有し、獣医学教育の充実に資するよう活用していることに加え、ISO/IEC17025 認定を取得した「動物・食品検査診断センター」や国内唯一の「原虫病研究センター」を設置し、外部機関と連携しながら検査・診断や先端研究に取り組んでいることは、特色である（評価の視点 6-15）。

北海道大学

- 1) 国際実験動物管理公認協会（AAALAC International）による完全認証を受けた動物実験施設を有し、動物福祉に配慮して適切な実験を行うとともに、「人獣共通感染症国際共同研究所」等の感染症分野における卓越した教育・研究基盤を生かし、国際的に人獣共通感染症の克服に向けた取り組みを行っていることは、特色である（評価の視点 6-15）。
- 2) 「国際獣医師人材を育成する獣医学教育世界展開プログラム」として、海外の大学と単位互換プログラムを構築するほか、海外獣医系大学と連携した実習を行うなど国際化に積極的に取り組むことで国際感覚を備えた人材の育成に努めていることは評価できる（評価の視点 6-19）。

7 社会連携・社会貢献

<概 評>

地域社会の住民及び獣医師に生涯学習の機会を提供する学術講習、研修、セミナー、公開講座等については、各大学で積極的に開催している。

帯広畜産大学では、「原虫病研究センター」を設置していることや、産業動物臨床・馬臨床の分野に強みがあることを生かし、外部講習会への講師派遣や、産業動物臨床獣医師を対象とする研修を実施している。また、附属獣医学教育病院において数日間にわたる獣医師の卒後教育・研修を実施するなど、生涯学習の場を継続して提供している。加えて、当該大学の教育研究や社会貢献等の取組みについて体験や展示を通じて周知を図るため、市民を対象に「畜大ふれあいフェスティバル」を開催している。同イベントの運営にあたっては、教員及び学生が積極的に関わっており、毎年多くの住民が参加している。

北海道大学では、感染症研究、野生動物研究、伴侶動物臨床に強みがあることを生かした学術講習や研修会を開催しているほか、附属獣医学教育病院を活用して伴侶動物獣医師を対象とした卒後教育セミナーや、一般市民を対象とした研究会・セミナー等を開催している。これらには毎回多くの参加者が参加していることから、獣医師及び一般市民のニーズを汲んだテーマが取り扱われていることが推察できる。加えて、社会貢献の一環として高校生を対象としたセミナーを開催している。

このように、各大学において教育資源を活用しながら積極的に社会貢献活動を行っていることは、評価できる。今後は、両大学が協働し、獣医師や一般市民に向けて生涯学習の機会を提供していくことを期待したい（評価の視点 7-1、7-2）。

<提 言>

(1) 特色

帯広畜産大学

- 1) 附置研究所や産業動物臨床・馬臨床に強みを持つ大学の特長を生かした学術講習や研修、セミナー等を積極的に実施するほか、数日間にわたる獣医師の卒後教育・研修や地域住民を対象とした「畜大ふれあいフェスティバル」を開催し、生涯学習の場を継続して提供していることは特色である（評価の視点 7-1、7-2）。

北海道大学

- 1) 感染症研究や野生動物研究、伴侶動物臨床に強みをもつ大学の特長を生かし、獣医師のみならず一般市民を対象とする学術講習やセミナー等を数多く実施し、多くの参加者を得ているほか、高校生を対象としたセミナーも開催するなど、生涯学習の場を継続して提供していることは特色である（評価の視点 7-1、7-2）。

8 点検・評価、情報公開

<概 評>

自己点検・評価を実施するにあたり、帯広畜産大学においては、全学で「自己点検・評価ポリシー」を定め、各部局での自己点検・評価結果を「戦略会議」において精査し、役員会、経営協議会、教育研究評議会において改善に向けた検討・審議を行い、これらの組織の意見・助言等をもとに、各部局において、さらなる改善・改革を推進することとしている。当該課程においては、「ユニット会議」が中心となり、点検・評価を実施している。また、教育の質を保証する仕組みとしては、「大学教育センター」を中心として、教育研究上の基本組織、内部質保証、財務運営、管理運営及び情報の公表、施設・設備及び学生支援、学生の受け入れ、教育課程と学習成果に関する目標を定めて計画を立案・実施し、自己点検・評価に基づいた改善・改革を実施することとしている。

北海道大学では、「北海道大学大学院獣医学研究院・大学院獣医学院・大学院国際感染症学院・獣医学部点検評価内規」に基づき、「北海道大学大学院獣医学研究院・大学院獣医学院・大学院国際感染症学院・獣医学部点検評価委員会」を設け、当該課程の点検・評価に関する事項を担うこととしている。点検・評価の結果、改善が必要と認められる事項については同委員会においてその改善に取り組むとともに、関連する委員会において改善策を検討することが必要と認められる事項については、学部長（研究院長）が該当する委員会に付託するものとしている。

上述の各大学における取組みに加え、共同獣医学課程として「北海道大学獣医学部・帯広畜産大学畜産学部共同獣医学課程協議会規程」を定め、これに基づき「北海道大学獣医学部・帯広畜産大学畜産学部共同獣医学課程協議会」を置いている。同協議会は、当該共同教育課程の運営に関し、必要な事項を協議するために設置され、教育課程の編成・実施に関する基本的事項等のほか、自己点検・評価に関する事項についても協議することとしており、毎月1回開催している。また、同協議会のもとには、教務委員会や「アドバンス委員会」「学習管理システム委員会」「共用試験委員会」のほか、「共同獣医学課程国際認証推進委員会」や「質保証（QA）委員会」等を設けている。「共同獣医学課程国際認証推進委員会」においては、欧州獣医学教育機関協会による認証を取得・維持するための自己評価報告書及び中間レポートの作成を行っている。さらに、「質保証（QA）委員会」においては、当該共同教育課程における教育実施体制やカリキュラム、学生の修学環境等の改善に取り組むほか、学生や卒業生、卒業生の就職先に対するアンケート調査を取りまとめ、教育改善に活用している。

以上のように、各大学で設置する委員会における自己点検・評価に加え、両大学が連携して、共同教育課程として委員会を設置し、質保証を行う仕組みを整備・運用するとともに、2019年度には欧州獣医学教育機関協会による国際認証を取得するなど教育の質保証に努めていることは特色として評価できる。今後も、認証の継続に向けた取組みが期待される。なお、学内外のステークホルダーからの意見聴取を行い、改善につなげ

る仕組みとして「教育懇談会」を開催し、同懇談会にて出された意見については、「共同獣医学課程協議会」に提言・共有している（評価の視点 8-1、8-2）。

情報公開に関しては、「帯広畜産大学情報公開取扱規程」「国立大学法人北海道大学情報公開規程」を定めるとともに、各大学でホームページを作成し、獣医学教育の目的や3つの方針、教育課程の概要などの教育に関する情報に加え、自己点検・評価の結果を適切に公表している。また、共同獣医学課程のウェブサイトを開設し、共同獣医学課程の概要や、教育上の理念及び養成する人材像、国際認証取得の意義等を掲載している。

学生への情報開示に関しては、各大学ホームページ、共同獣医学課程のウェブサイト及び両大学の学生が利用する情報管理システム「Vet Portal」を通じて行うほか、シラバス等を配付している。教職員に対しては、教職員メーリングリストを活用することに加え、各大学及び両大学合同で開催する各種会議等を通じて適切な情報共有が行われている（評価の視点 8-4、8-5）。

< 提 言 >

(1) 特色

帯広畜産大学・北海道大学（共通）

- 1) 共同教育課程として「北海道大学獣医学部・帯広畜産大学畜産学部共同獣医学課程協議会」を中心とする質保証の仕組みを整備し、両大学が協働して、教育改善に取り組んでおり、欧州獣医学教育機関協会による国際認証を取得するなど教育の質保証に努めていることは特色ある取組みである（評価の視点 8-1、8-2）。

以 上